

# いわかづみ

令和六年十二月 第九九号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(18)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑤)下駄・鼻緒
- ◇ 方言一考(やつきり)
- ◇ 佐藤中央文庫のご紹介
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(18)

## 峠を越えた人たち⑨

### 海幸山幸を運んだ行商の人たち

渡辺伸栄

#### 峠で想うのは

古道を訪ね峠を歩いて、いつも想うのは、ここを越えた人たちのこと。

蛇喰に河内古道がある。安久館長さんは子ども頃、母御の実家へこの峠を走って越えたという。今はヤマビルがのさばり、大人でさえもとても通れる道ではない。

私はと言えば中学生の頃、沼の女友達にちよつと逢いに行くという早熟の同級生に連れられて、鷹巣峠と榎峠を越えて往復したことがある。二人とも下駄ばきで、さつと歩いて、家の前で立ち話して、さつさつと帰ってきた。

現代の古道歩きは登山身支度。その姿からは想像もできないほど、どこも古道も峠も、気軽に歩ける手入れの行き届いた山道だった。

峠を挟んだ村と村、例えば朴坂と松沢、あるいは金丸と玉川、どちらも山の向こうと縁戚関係があると聞いた。峠の道は、嫁とり婿とりの道だったのだ。

山を越えて盆踊りの囃子が聞こえてこようものなら、若い衆、心急かして峠の夜道を駆けただろう。あの早熟の友人のように。

朴坂山塊を越える松沢古道。以前、佐藤貞治元館長さんも消えた道を探していたと、下見のときの安久さんの話。それを聞いて、ふと思つた。元館長さんも、盆踊りに通つた若い衆の一人で、さては昔を懐かしんで古道を探したか。あの謹厳な顔を思い出し、藪の中で二人、密かな笑い。

#### 松沢古道は塩谷道

その松沢古道。今は道跡も消え、完全な藪。大勢の参加者と、とんでもない藪漕ぎをしてからもう六、七年になる。あのときは、松沢への

盆踊り道かな、などと想像したものだが、よくよく地図を見て気付いたことがある。

朴坂を含む荒川右岸・女川流域と塩谷を結ぶ最短ルートだと。

かつて我が家の辺りも、塩谷や桃崎浜から魚売りのアネサやオツカサンが何日か置きに来て、その日は、生魚や塩魚を食べることができた。この人たちが、近所の家の軒先に店開きして、日がな一日そこにいた。魚をさばいてくれたり、年寄りたちの話し相手になったりして。

自転車に魚箱を積んで来ていたから、多分、米坂線の鉄道で来て、下関から自転車だったのかもしれない。

行商にはもう一つ思い出がある。高校を卒業した年の一年間、沼小学校に勤めた。その頃は宿直日直があつて、日曜の夕、宿直勤務のため一人で片貝駅から沼に向かって歩いてた。そのときに、沼から帰る魚売りの行商人とすれ違つた。女二人連れだった。

顔に手拭、頭に饅頭笠、小袖の着物に手甲、たつつけ履きで地下足袋。背には何段か重ねた魚箱。

私の母なども、魚箱こそ背にしてないが、まったく同じ身支度で野良仕事に出たもので、このスタイルを確か「でだち」と言っていた。

鉄道も車もなく歩くしかなかった時代、塩谷の魚行商の人たちも、同じようなスタイルで、

最短ルートは松沢・朴坂道を越えたのではないだろうか。

何しろ、滅多に魚など手に入らない山村山里にとつて、魚の行商ほどありがたい存在はなかった。「今日はハマノシヨ、まだだろか」などと、道に出た親たちが会話していたものだ。



2018.5.20 松沢古道の藪を漕いで朴坂山山頂

### 桃崎浜の行商人

小国町発行の「小国の交通」に、「越後古道史話」という書物からの引用らしいが、面白い話が載っている。

古く江戸時代から、桃崎浜のシヨイコと呼ばれた人たちが、男性同士、又は女性同士で五、六人の組になり、小国町まで毎日のように乾物や塩魚などを運んできた。

暗いうちに桃崎浜を発ち、片貝か沼の辺りで昼食。その後、大里峠を一気に越えて玉川。そこを過ぎると萱峠の手前に茶屋兼宿屋があつて、そこで一泊。この宿は、米沢藩が設けた助(たすけ)制度の宿で、具合が悪くなつた旅人を救助する役目も担っていたという。

翌日は、そこから小国に朝早く到着。運んだ荷をさばいた後、帰り荷に、タバコ、麻布(青苧)、小豆、ゼンマイ、わらび粉、ワラビ、栗などを背負い、来た道を折り返して上関まで来て一泊。翌朝早く桃崎浜に帰る。二泊三日の行程だったという。

我が家の辺りに来ていたハマノシヨは、帰りは空箱を自転車に積んで帰つたようだったが、江戸時代のこの人たちは、往復を無駄にしない。行商というより、運び屋稼業なのかもしれない。しかし、当時、商用の荷は宿場の継送りでなければならず、私的雇用人による通し運びは禁止されていたから、あくまでも行商ということだったのだろう。

ともあれ、古道や峠を最も頻繁に歩いたのは、海幸山幸を運んだこのような人たちだったということになる。

今、NHKで「坂の上の雲」が再放送されていて、エンディングで小蓮華山から白馬岳に続く稜線の道が映される。この場面を見るたびに、そこを歩いた日を思い出し、土のくぼみや小石の転がり跡に、「あ、これ、オレの足跡だ」と思つてしまう。

峠道の石畳のへこみ跡や地面の窪みなどは、そこを何度も往復した行商の人たちの足跡なのかもしれない。

### たつつけ余話

行商人が履いていた「たつつけ」、元々は袴。膝下の部分を細くして、脚絆のように紐で縛る。左右の腰から膝の上まで、両側に切れ込みが入っている。それで、腹側半分と尻側半部分を別々に紐で腰に縛る。つまり、前の紐をほどけば腹の下が垂れ、後ろの紐をほどけば尻の下が垂れる。それが何の意味があるかというと、脱がなくても履いたまま大小の用が足せるという実に便利な仕様なのである。

実は、沼の道で出会つた行商の人たちは、道端に並んで山側に背を向け突っ立っていた。その前を私が通つたのである。で、立って何をしていたかという、たつつけの後ろ部分を解き下ろして小用を足していたのだ。魚箱を背負つたまま、足を開き仁王立ちで私を睨みつけながら。

だから、顔を背けて見ないふりで前を通った。が、たつつけのあまりにも便利な機能に驚いて、心底真実、民俗学的探究心で、ついつい横目で見てしまった。それで、六十年経った今でも、鮮明に思い出せるというわけなのである。



**民具が語る生活史④下駄(ゲタ)・鼻緒(ハナオ)**

下駄(ゲタ)は、民具大辞典では、「木や竹の台歯の表面に三つの穴を開け、逆Y字形の鼻緒(はなお)や前穴だけにT字形の端(はな)棒を取りつけた、歩行に用いる履物」と規定されています。

下駄につきものの鼻緒(ハナオ)は、前緒と横緒で構成されています。元来は前緒の呼称だったハナオ(端緒)が拡大使用され、紐全体が「鼻緒」と総称されるようになりました。

下駄の歴史は古く、5〜6世紀の遺跡から出土しており、地方の豪族が権威の象徴として履いたと推測されます。江戸時代、18世紀後半になると進歩した工具が出回るようになり、桐下駄や各種の下駄・鼻緒屋が出現します。明治末になると広島県の松永で機械工作による下駄が作られ、大正時代には庶民に普及しました。ただ、農村では依然下駄は高価なものであり、草履が主な履物という時代は長く続きます。日本全国での生産のピークは昭和30年代といわれ、その後ゴム製の靴が普及し始めます。これには戦後のモーターゼーションや道路のアスファルト化、和装から洋装へのファッションの変化などが関係しているようです。

先日、関川村のあるお家に伝わる鼻緒製作キット一式を見せていただきました。「廃品利用鼻緒製作器」と書かれた紙袋に入っています。

中身は、写真の右から、木製の口金、竹櫛、針金つきの板状の台です。左は紙袋で「大日本婦人會本部推薦」とあります。



大日本婦人會は太平洋戦争期の大日本帝国の婦人団体で、昭和17(1942)年に発足し、全ての女性を国家総力戦体制に動員することを目指して活動しました。解散は昭和20(1945)年6月です。この「廃品利用鼻緒製作器」もこの3年間の中で作られ、一般に販売されたものではないでしょうか。

昭和12(1937)年に日中戦争が始まると、もともと重要資源に乏しく輸入に依存していた日本は、限られた資源を軍需物資に優先的に充てていきます。また農作物の作り手が戦争に駆り出され、食糧にも事欠くようになります。戦争の長期化により配給制度がとられるものの、戦後も物資不足は続き、都市部の人々は農村へ食糧の買い出しに行ったり、闇市で法外な値段の物資を買ったりせざるを得ませんでした。衣類は食糧と交換され、破れても繕いながら着用することが一般的でした。農村でも物資不足には変わりなく、ここ関川村でも砂糖が手に入らず苦労した話、食用にとかたくりの根を採りに行った話などが語り継がれています。

2025年は終戦80年の節目の年です。「廃品利用鼻緒製作器」は、戦中の生活資料として貴重なものであり、何よりその時代背景をあらためて考えさせるものでした。(神田舞子)

参考文献「下駄」「鼻緒」日本民俗学会編1997『日本民具辞典』ぎょうせい出版



## 方言一考・やつきり

「やつきり」は一生(所)懸命に、熱心に、等の意味を表す方言だ。畑仕事をする人の脇を通る人が「やつきりだね」と声を掛けるのはこの村での日常の光景である。「やつきりだね。あいや、んめさんごのでえごん立派だごど、おれちよのでえごんの倍もある」というのは「余念なく畑仕事なさってますね。それにしても掘り出したその大根の良く成長した様は私の作っている大根の二倍です」と、働きぶりとその結果を褒めれば「いやいやんめさまこんだんのなりばっかりおつきよでんもねやんさ」と謙遜して小春日和の日は暮れる。

荒川台の芍薬と道の駅の巡回と奥様の送迎に後半生を費やしてきたK氏、三番目の生き甲斐を失った今年はずいぶん朝から芍薬園に通って「やつきり」だったが、冬になってその仕事もできなくなり、今はやつきり部屋の整理をしていると言う。暇になった妻が今まで以上に彼の生活に干渉して、無断で彼の物を無暗に捨てる状況だと言う。私は彼の部屋を見たことは無いが、彼の車の中を見れば想像できる。「ボランティアで道の駅の清掃をしている人間がどうして自分の部屋をゴミの山にしていられるんだらう」という奥様の感情である。しばらくはやつきり部屋の片づけをした方が良さそう。そうしないとその大元も捨てられかねない。(安久)

## 佐藤央文庫の紹介

新発田市の佐藤央(ひろし)さんから図録、画集等百五十冊の寄贈がありました。企画展に合わせて出版される図録は部数が限られ増刷もしないため、貴重な資料です。歴史館のエントランスホールで閲覧することができますので、暖かいホールで外の雪景色を見ながら画集を開くエレガントな時間をお過ごしください。

佐藤さんは村内上関のご出身で、新潟市美術館や旧新潟市美術館に長く学芸員として務められ、当館の企画展でも多大なご指導とご協力を頂いた方でもあります。併せて感謝いたします。(安久)



## 歴史館行事の報告

○秋の古道歩き 出羽街道「中継く小名部」9月

29日(日)、参加者27名＋スタッフ3名

## ○秋の美術館巡り

① 越後妻有里山現代

美術館 Mori・清津峽

10月12日(土)参加者

23名 ②中野邸記念館

エジプト美術館展 11月

9日(土)参加者22名

○秋の健康登山「坂戸山」

10月26日(土)、参加者20名＋スタッフ6名

○佐藤忠良さんによる歴史講座 10月「せきかわ

ふるさと塾」から「大したもん蛇まつり」へ 10

月23日(水)、11月 関郷の昔・霧出の昔 11月

27日(水)、いずれも当館映像ホールにて。

○古文書解読講座(9、12月) 常設展示の下川

口会所関係、戊辰戦争関連史料を読んでいます!

## お知らせ

○山と花のスライド解説会 期日:1月19日(日)

午後13時半〜・映像ホール。申込お願いします。

○村民ギャラリー「新春書き初め作品展」会期:1

月4日(土)〜2月2日(日)、月曜休館・月曜祝日

の場合は翌火曜休館、観覧無料。

○年末年始休館 1月4日(土)から開館します。

みなさま、よいお年をお迎えください。

いわかがみ 第九九号

発行日 令和六年十二月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel:0254-64-1288 Fax:0254-64-0300

